

ヒュー・ロフティング 作
麻野一哉 訳
こすまさん 絵

ドリトル先生物語



ksssk

第1章 パドルビー

昔々、何年も前。

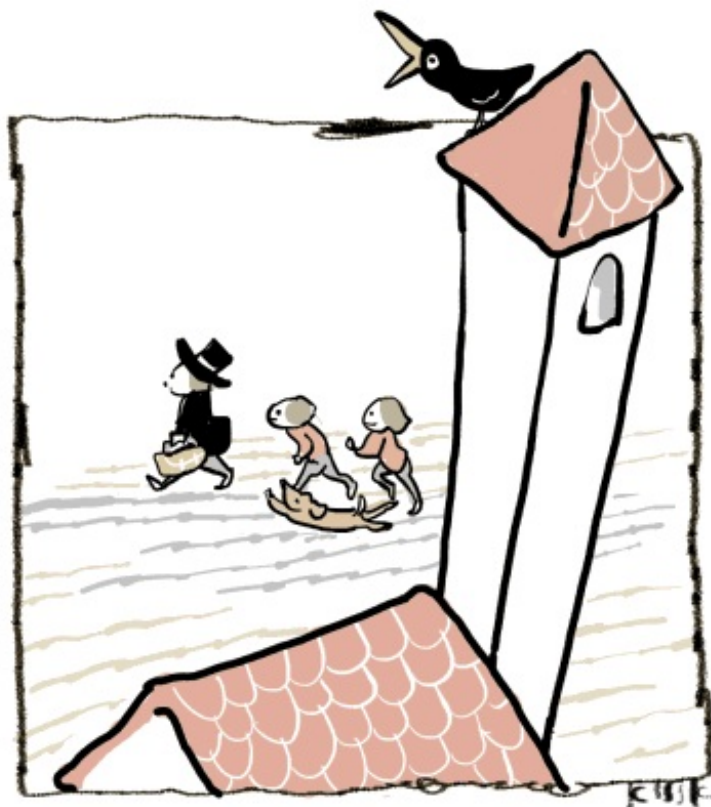
おじいさんやおばあさんがまだ小さい子供だったころ、ジョン・ドリトル先生という医学博士がいました。

医学博士というのは、りっぱなお医者さんで、いろんなことを知っているという意味です。

ドリトル先生は沼のほとりのパドルビーという小さな町に住んでいました。

町の人はずれもが先生のことをよく知っていて、先生の背高帽子（せいたかぼうし）を見かけると、「あ、ドリトル先生だ！
すごく頭のいい先生なんだよ」と口々にほめました。

イヌや子供は、かけだして行って先生の後をつけて歩き、教会の塔のカラスまで「カア」と鳴いて首をふります。



先生の家は町はずれにある、ちっぽけな家でした。

けれども庭はちがいます。

芝生がしかれ、石のベンチがおかれ、しだれ柳が何本もゆれている、とても大きな庭です。

家の中のことはサラ・ドリトルという先生の妹が切り盛りしていましたが、庭だけは先生が自分で手入れをしていました。

先生は動物が大好きで、ペットをいっぱい飼っていました。

池に金魚。

台所にウサギ。

ピアノの中に白ネズミ。

タンスにリス。

地下室にハリネズミ。

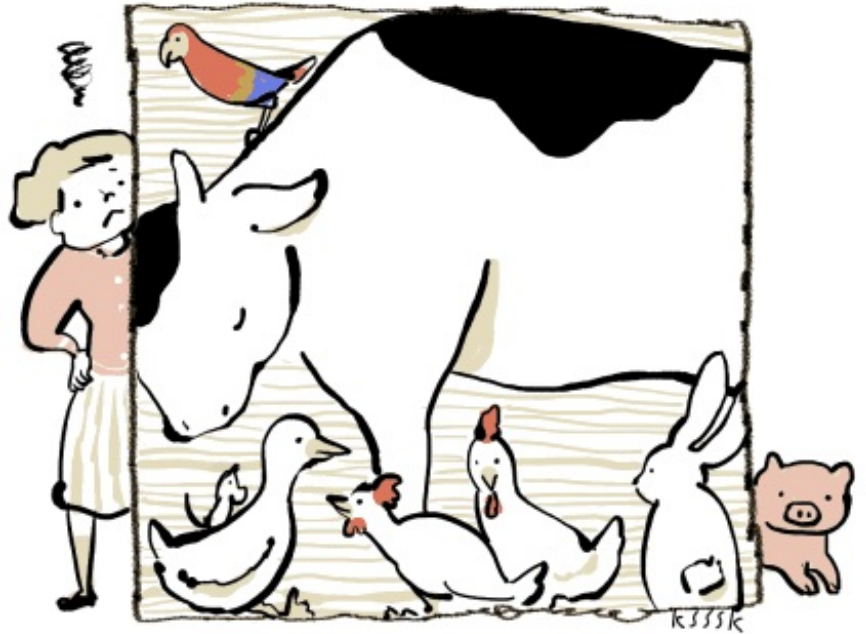
子持ちのウシに、よれよれの25歳のじいさんウマ。

たくさんのニワトリと、ハトと、2匹のヒツジと、他にも色々。

けれども先生のお気に入りには、『ダブダブ』というアヒルと『ジップ』という犬。

それから、『ブウブウ』という子ブタとオウムの『ポリネシア』。そいでもって、『ホーホー』という名前のフクロウでした。

先生の妹のサラは、「動物のせいで家がぐちゃぐちゃになるわ」と、いつもブツクサいってました。



そんなある日のこと。

「ひゃあ！」

リウマチ患者のおばあさんが、ハリネズミの寝ているイスに腰を下ろしてしまい、二度と来なくなってしまいました。

15キロ先のオクセンソープという町の別のお医者さんに毎週土曜日、車で通うようになったのです。

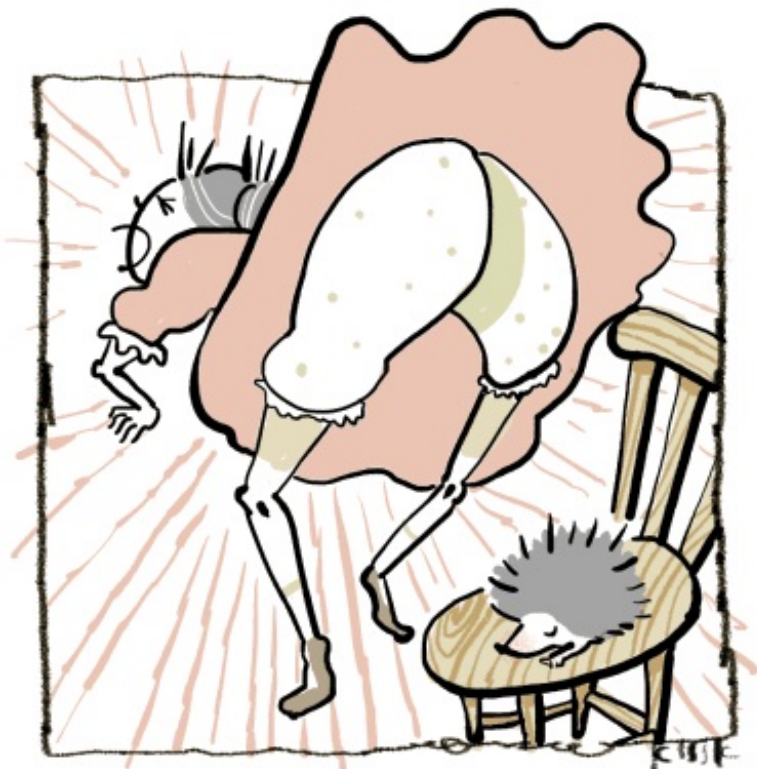
妹のサラはいいました。

「兄さん、こんなに動物だらけで患者さんが来るわけないでしょ。診察室にハリネズミやネズミがあふれてるなんて、ありえないわ！動物のせいで来なくなった人はこれで4人目よ。地主のジェンキンスさんも牧師さんも『病気になってもこの家には近づきたくない』ってよ。もう、毎日、貧乏が止まらない！こんなことしてたら、金持ちは誰も来なくなるじゃない」

「金持ちより、動物のほうが好きなんだ」

「この、変人！」

妹は部屋から出て行きました。



第2章 動物語

その日、先生は台所で、おなかが痛くなってやってきたペット・ショップ『ネコマンマ』の主人と話をしていました。

ネコマンマの主人がいます。

「ねえ、先生。もう人間の医者はやめて、動物の医者になったらどうだい？」

そのとき、オウムのポリネシアは窓にとまって、外の雨を見ながら船乗りの歌をさえずっていました。

しかし、ネコマンマの主人のことばを聞くと、歌をやめて聞き耳を立てました。

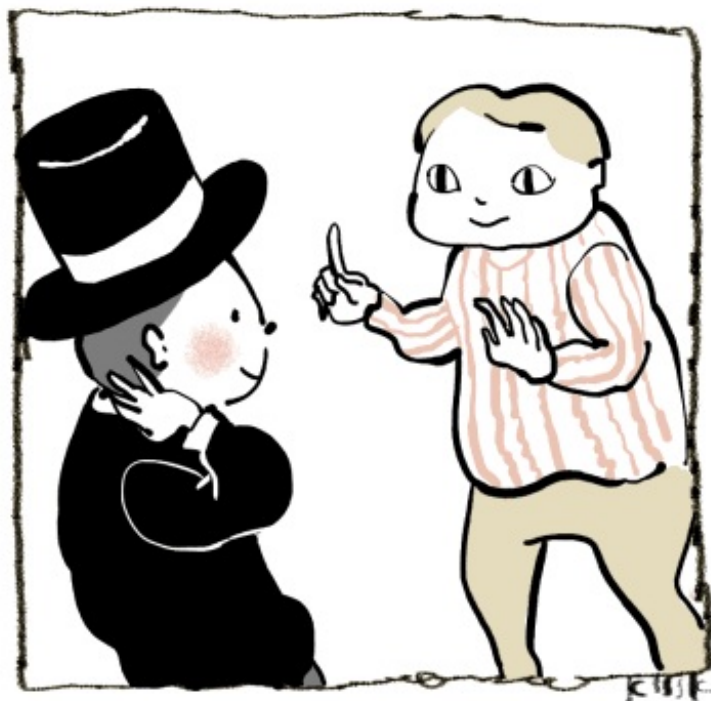
「いいかい、先生。先生は、動物のことだったら何でもわかる。そこいらの獣医より、よっぽど何でも知っている。先生の書いたネコの本、あれは本当にすばらしい！」

「それほどでも……」

先生はけんそんしましたが、主人はきいていません。

「いや、オレは読み書きはダメなんだけどね。というか、それができたら、オレも本の一冊くらいは書いてるはずなんだけどね。しかし、女房のテオドシア。あいつは学があるからね。あいつに先生の本を読んでもらったんだ。いやあ、あれはすばらしい。すばらしいとしかいいようがない。」

「いやいや……」



「なんだそりゃ！ どういう意味だ？」

「これは鳥の言葉で、『おかゆはもう、あつたまつたか？』という意味です」

「へえ！ お前さん、今まで、そんな風にしゃべったことなんかなかったじゃないか！」

「どうでしょうねえ」

ポリネシアは、左の羽根からクラッカーのかけらを払いのけながらいました。

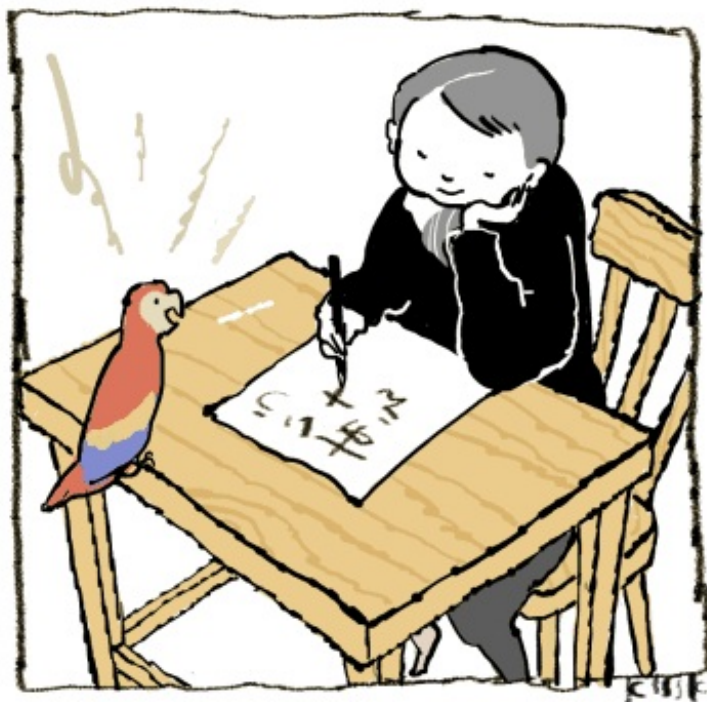
「いっても、先生にはわかんなかったでしょうからねえ」

「もっと聞かせてくれ」

先生はとても興奮して、走ってドレッサーまで行って、引き出しから紙と鉛筆を出してきました。

「いいかい、ゆっくりやってくれよ。書くからね。こいつはおもしろい。実におもしろい！ まったく聞いたことがない話だ。まずは、鳥の『あいうえお』からだ。ゆっくりやってくれ」

こんな風にして、ドリトル先生は、動物には言葉があって、おたがいに話をしているということを知ったのです。



後日、ドリトル先生が大きなグリーンのメガネをウマにあげると、ウマの目は、また前のように見えるようになりました。

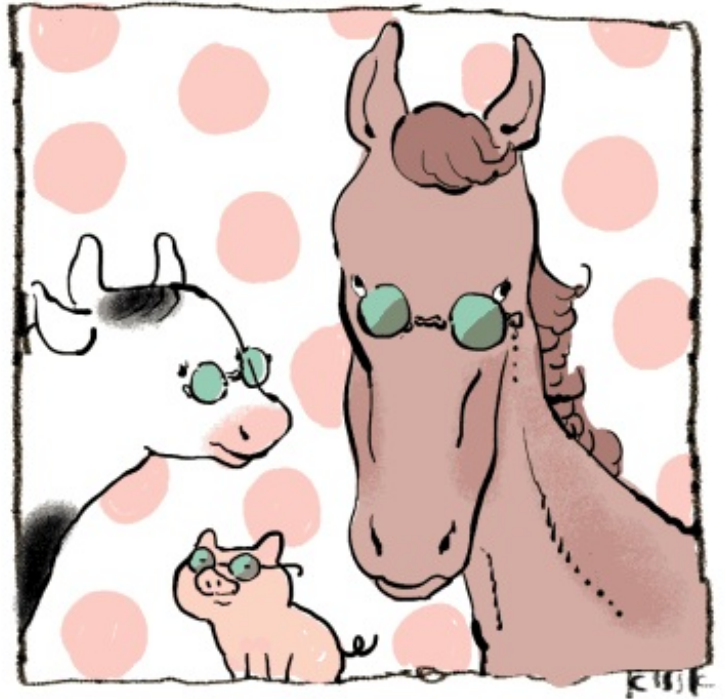
のちに、パドルビー周辺では、メガネをかけた動物がいるのが当たり前の風景となりました。目の悪いウマというものがなくなったのです。

そんなこともあって、たくさんの動物が先生のところに連れてこられるようになりました。

ことばが通じると、どこがどう痛いか説明できるので、すぐに治るのです。

動物は家にもどると、兄弟や友達にこういいます。

「大きな庭の小さな家のあの先生は、ホンモノのお医者様だよ」と。



ある日の午後、ドリトル先生は熱心に書き物をしていました。

ポリネシアはいつものように窓にとまって、庭でゆれている木の葉をながめていましたが、いきなり大きな声で笑い出しました。

「どうしたね。ポリネシア」

先生は書き物の手をとめました。

「ちょっと考えてたんです」

ポリネシアはそういうと、また木の葉に目をやりました。

「なにを？」

「人間のことです。なんだかねえ……。人間は自分のことを一番えらいと思ってますよね？ 全然、動物のことはおぼえないくせに。何千年たっても、わかるのは、『犬がシッポををふってるときは喜んでる』だけなのに。バカバカしい！」

